

## 里山のソテツ栽培 —琉球列島から房総半島へ—

盛 口 満\*

### Cultivate of sago palm at Satoyama —From Ryukyu Archipelago to Boso Peninsula—

MORIGUCHI Mitsuru

#### 要 旨

琉球列島の里山には、重要な要素としてソテツの栽培とその利用が挙げられる。一方、本土においても房総半島南部の里山においては同様のソテツ栽培が見られる。その南房総の里山のソテツ栽培の歴史と、琉球列島との関わりについて述べる。

キーワード：里山 ソテツ 琉球列島 房総半島

#### 1. はじめに

「人里近くに存在する山を中心に、それに隣接する雑木林・竹林・田畑・溜め池（貯水池）・用水路などを含む空間的広がりの中で、人びとが生活してゆく上でさまざまな関わり合いを維持してきた生態系を“里山”という」（阪本 2007）

民俗植物学者である阪本寧男は、里山を上記のように定義している。例えば著者が15年ほど居住していた関東山地の山裾に位置する埼玉県・飯能には、本流に流れ込む支流沿いに並んだ田を中核として、里山が形成されていた。ただし、著者が居住した1990年代において、その里山はかつての姿と様相を変えつつあった。谷深くに入り込んだ田の多くは休耕田となり、また、クヌギやコナラを主体とした雑木林も、その大部分はスギの植林地に置き換えられてしまっていた。そのほかにモウソウ竹林や桑畑があったが、桑畑もまた放棄されたものが多かった。それでも、人々がどのように自然を利用し、暮らしてきたのかは、なおその景観から明らかであった。

\* 沖縄大学人文学部こども文化学科 kamage@okinawa-u.ac.jp

著者が現在居住する琉球列島においても、先の定義にしたがえば、里山は存在する。しかし、琉球列島における、戦後の里山の景観の変化は、埼玉のそれとは大きく異なり、現在の姿からはほとんどかつての景観を思い浮かべることが不可能なほどの変化を遂げている。このため、著者は、お年寄りからの聞き取り調査から、かつての各島における里山の復元が行えないかと試行してきた（盛口 2011）。その調査の中で、かつての琉球列島の各島における里山の中で、ソテツが重要な位置を占めていたことが徐々にわかってきた。ソテツは、島によって異なるが、里山のいろいろな場所に植栽されていた。ソテツの実や幹のデンプンは食糧として利用され、さらに葉は緑肥の材料となり、また枯れた葉も燃料として利用された。畑の畔に植えられることで、土止めの役割も果たしていた。

本稿では、琉球列島の里山の重要なファクターとなっていたソテツについて、さらに重層的な理解を深めるために、房総半島のソテツ利用について紹介してみたい。房総半島南部の一部地域においては、ソテツが植栽されており、里山の中にソテツ群落が位置づいている。ちなみに著者もこの地域（千葉県館山市沼）出身であり、里山にソテツが植栽されているのは著者にとっては「あたりまえ」の光景であった。

## 2. 琉球列島のソテツ植栽状況

かつての琉球列島における里山の有り様については文献からも、その一部をたどることができる。日本に開国を迫ったペリーは、琉球にも訪れている。その際の記録は、当時の琉球の様々な様子を今に伝えるものとして貴重である。そして、記録の中にはソテツについての記述もみられる。フリゲート艦ミシシッピ号に乗務していた軍医のD・S・グリーンが書いた報告書「大琉球列島の風土と疾病および農業」の中には、グリーンが、最初に里山におけるソテツの植栽を見たときに、通訳にこれは何かと尋ねたくだりが紹介されている。その問いに対して、通訳は「琉球の北部は非常に不便な土地なので貧しい人々はソテツを植える必要がある」と答えたとある。和訳された報告書の一部を引用すると、当時のソテツの植栽状況が以下のように紹介されている(『ペリー艦隊日本遠征記 Vol. II』)。

「岩石のない山では、高さが300フィート（約90メートル）以上あってもソテツが頂上まで植えられている。なかには斜面角が75度近くあるものもある。(中略) 流出を防ぐため、または耕作地を作るため、またはこの両方の目的で、山の下から上へと向かって細長い土地が耕され、ここにソテツがジグザグ状に密に植えられる。(中略) ソテツはこのような「不便」な土地だけでなく、尾根やでこぼこの土地、また、十分肥沃な土がある岩の多い丘にも植えられている」

これを読むと、当時、いかにたくさんのソテツが里山に植栽されていたかがわかる。また、この記述は通訳とのやり取りからすると、グリーンが沖縄島北部で見たもののようだ。しかし、現在、沖縄島北部に行っても、海岸の崖地などではソテツの群生を見ることはあっても、このグリーンの記述のような光景を見ることはない。

ソテツは琉球王朝時代、救荒食用にと、盛んに里山に植栽された。例えば、明治になって以降も、明治14（1881）年の小飢饉の折、沖縄県令であった上杉茂憲による視察時において、沖縄島の各間切りでソテツ食が見られたことが記録に残されている（『沖縄県史 第11巻資料編1』）。この上杉県令による1881年時におけるソテツ食の記録は、沖縄島南部の東風平や大里、中部の浦添、北谷においてもみられたとあるが、現在、沖縄島中・南部は北部以上にソテツの姿が見られることが無くなってしまっている。

一方、琉球列島に中でも、奄美大島においては、少し事情が異なっている。奄美大島も、沖縄島同様、昔から救荒食として利用できるソテツを里山に植栽してきた歴史があるが、沖縄とは異なり「ソテツ文化」とでも呼べる、特にソテツを重視してきた島であり（盛口 2013）、現在もなお、里山においてソテツの群生地が残されている。なお、こうしたソテツ文化が生み出された背景には、薩摩藩の琉球侵攻以後、奄美大島は琉球王朝から切り離され、薩摩藩の直接支配を受けたという歴史が関与する。全島挙げての砂糖増産に追い立てられた奄美大島においては、住民のために必要な食糧生産の田畑までサトウキビ栽培に置き換わったため、日常的な食糧にも事欠くようになってしまった。そのため、ソテツの利用が重視され、ひいてはこれがソテツの多角的な利用とつながり、ソテツ文化を生み出したと考えられるのである。ただ、この奄美大島においても、往時に比べればソテツの植栽量は減少している。その理由はいくつかあるが、そのひとつに、奄美から他地域へのソテツの移植があったと考えられる。その移植地が、琉球列島を遠く離れた房総半島南部である。

### 3. 房総半島のソテツ栽培の歴史

房総半島南部において、ソテツは、植木および切り葉用として栽培されている。館山市・南房総市・鴨川市・鋸南町のソテツ栽培面積は、合計約73ヘクタール（1997～98年現在）とされる（斉藤ほか 2009）。ここで明らかのように、房総半島南部の里山におけるソテツは琉球列島の里山における、救荒食・緑肥・燃料・土止めなどの用途ではなく、換金作物としての栽培であり、琉球列島に比べればずっと近代になって里山の景観に入り込んだものである。

そこで、南房総における、ソテツ栽培の歴史を文献からたどってみることにする。南房総では、ソテツの栽培の導入以前より、花卉の栽培の歴史があった。明治時代中期からテッポウユリ栽培が始まっている。また、明治後期になると、南房総市南無谷ではボタン、スイセン、グラジオラスが栽培されるようになり、大正中期には、マーガレット、アネモネ、キンセンカ、ルピナスなど多様な花々が栽培されるようになった（『房総の花』）。このような花卉栽培の歴史の中で、あらたに取り入れられた作物がソテツということになる。

1924（大正13）年、館山市神戸、布沼の和泉沢安兵衛、佐野民造氏らが奄美大島よりソテツを導入したのが、南房総のソテツ栽培の始まりとされる。このとき、買入れたソテツが多すぎて、「近所の人に分けて作ることをすすめた」と文献には書かれている（『房総の花』）。一方で、このソテツの導入（佐野民造氏らが鹿児島島の森本商会を通じ、奄美大島から貨車4

両分を購入とある)が、大正13年ではなく、昭和12年から14年にかけてのことであるとする文献もある(『房州の花』、『富浦の花』)。ただし、後述するように富浦で昭和5年のソテツの葉の値段が記されている記録があることからすると、ソテツの導入自体は大正時代であると考えられる(それとは別個に昭和10年代に大規模な導入があったということかもしれないが、この点についてはまだ確認ができていない)。

南房総市富浦におけるソテツ栽培については、以下のような記述が文献にみられる(『富浦の花』)「観賞用として古くから栽培」「大正時代には、すでに量はすくないものの、葉を出荷」「富浦においては、南無谷の古内義高氏が自身で奄美大島まで出向き、種苗を購入し、営利栽培を始めた」。なお、ここにその名が見られる古内氏は、ソテツ栽培を始める以前、すでに1897(明治30)年頃から自身の山でシキミやハランの栽培にいち早く手を染めていたという人物である(『房総の花』)。

なお南房総のソテツ栽培に関連して、その供給地にあたった奄美大島のソテツについての興味深い記述がみられる。

「戦後安房郡内の各花卉組合がソテツを移入し、年間100~200トンのソテツの株が植え付けられ、現在は、産地の奄美大島より安房郡の方が、ソテツが多いくらいである」(『房総の花』)

「戦後昭和20年代後半から現在に至るまで毎年大量の根株が奄美地方から導入され、山野には植えられました。その量は同地で手近に得られる株のあらかたが掘り取られたともいうほどに膨大な量にのぼっています」(『房州の花』)

後者は1978年に出版された文献の中に見られる記述である。

はたして、奄美大島よりも南房総のほうが、ソテツの量が多いかは疑問であるが、文献を見る限りにおいては莫大な量のソテツが運び出されたのであろうし、奄美大島のソテツが減少しただろうとも考えられる。しかし、現在、その南房総の里山においても、ソテツは衰退の道をたどり始めている。植栽されたソテツ畑の中には、放棄されたものや、すっかり竹林に侵略され、枯死寸前となっているものも見られる。この理由はなぜだろうか。

#### 4. 南房総のソテツ栽培の現況

館山市・香谷は、海と背後の低い丘陵に挟まれた集落である。丘陵から流れ落ちる小川にそって、田が谷の奥にまでのびている(現在は、谷奥の田は休耕田化している)。丘陵に面した斜面や、住居周りなどにはソテツの植栽が見られる。2011年10月10日に農作業をされていたEさんという女性から、この地におけるソテツ栽培についての聞き書きを行うことができた。

「うちも以前はソテツをよくやっていました。30年前ぐらいのことですよ。ただ、10年ぐらい前にソテツをやるのはやめました。うちでは明治生まれの私の父がよくやっていたのですが、30年前に父が亡くなって、続けてはみましたが、体力的に無理だなあと、やめることにしました。年をとると大変ですから。今も続けているところはありますが、うちのおとな

りもソテツはやめてしまいました。ソテツは切り花としてやっていました。出荷するのは、秋のお彼岸の頃に出すこともあれば、春のお彼岸のころに出すこともあって、時期は選ばないようです。ここらへんは、冬でも菰をかけなくてもソテツは枯れませんから。うちでは父が山形の方によく出荷していました。東京に出す方もいるし、千葉の市場に出す人もいます。お彼岸ごろには、注文がくることもありました。小ぶりの物が欲しいと。横浜の方からも、お彼岸には小ぶりののがほしいという注文がありました。小ぶりのものは、お墓詣り用に使うようです。山形へは普段、長いものを出していました。なんに使うのかしらと話をしていたんですけどね。ソテツはもともと奄美大島のものじゃないかしら。菰で小さい苗を包んで持ってきて植えた……と聞いています。うちは、このあたりではソテツを植えたのが早かった方です。平らないい畑は、ほかのものを作って、ソテツは斜面を開墾して植えたんだと思います。今は人手がなくて、荒れちゃっています。荒れ放題になっちゃっていますね

このようなお話であった。

この話の中に、切り葉用のソテツは、苗を植栽したという話が出てくる（そのため、奄美大島のソテツが大量に運びだされた）。

南房総は温暖とはいえ、種子から植栽されたソテツが、葉を収穫できるまでに成長をするのには長い年月がかかってしまう。そのため切り葉用には、株を定植する方法がとられているためである。定植に適した株は、大きさが5～8 kg、幹の直径が15～20cm、長さ40cm程度のものでとされている。また、植え付けの密度は10 aあたり270～370本である（渡辺ほか 2001）。こうして定植されたソテツの苗からは、定植後4年目になってから葉が収穫できるようになる。そして定植後十数年を経過した株では、年間30枚の葉を収穫できる。すなわち、10 aあたりの葉の収量は、最高で9000～10000枚となる（渡辺 2001）。

また、ソテツ葉の収穫に当たっては、いくつかの注意点が必要とされる。話者の話の中のソテツの葉の長さについて言及している部分がそれに関連する。

「ソテツ出荷マニュアル（案）」（J A安房花卉部作成 2001年）には、以下のようにあげられている。

「ソテツの葉の付け根に寸長棒をあて、ハサミで切る」「東北方面市場では110cm以上の葉を求めている。東京周辺や都心に近い市場では、100cm程度でよい。また、90cm以下の葉も売られている」「葉は、3回に分けて、外側から収穫する。9月に新葉を収穫したら、中は3か月後、芯部の葉は次の新葉が開始めるころに切る」「葉は同じ圃場で収穫し、日陰葉は日陰葉だけ、日当たりのよい葉はそれだけで結束する」等。

好まれたソテツの葉の長さが、地域によって異なっていたことがわかる（また話者の話からは、このように長さの好みの違う葉が、消費地でどのように利用されているのかわからずにいたという点もうかがえる）。

こうして収穫されたソテツ葉の売り上げは、時代によって変動した。

富浦においてソテツの営利栽培を始めたころ、米1俵が6～7円であったのに対し、植栽

用のソテツの苗は1俵(60kg)17円であったとある。一方、この当時はソテツが3000株もあれば、その葉から得られる現金収入で、立派に生活できたとも書かれている(『富山の植物』)。

なお、富浦における1930(昭和5)年における記録では、マーガレットの値段は1本7厘強、ハランが1枚9厘、ソテツが1枚5厘とある(『房州の花』)。

1978年に出版された文献によれば、ソテツは「現在その株から切られる切葉は年間を通し切れ目なしに市場に供給され、栽培者に高い収益をもたらしています」(『房州の花』)とあり、ソテツ栽培に高い付加価値が認められ、将来が嘱望されていた栽培品目であったことがわかる。

同じころ、1979年頃の館山市におけるソテツの栽培と販売状況については、ソテツ葉の加工品(着色)は1枚50~60円の取引、無加工品で長い葉で40~50円、短いもので20~30円で取引されているとある。ソテツの切り葉は長短をそろえて10枚1組として束ね、さらに50枚組で出荷する。10aあたりの売り上げとしては、1枚30円で売るとすると、30万円ほどの利益となると具体的な値段が紹介されている。ただし、この当時もソテツの専業経営は見当たらず、畑の土手や山の開拓地に植栽が行われ、副業的に扱われているともある(『千葉の花』)。

ところが、2001年に書かれた文献によれば、「ソテツの価格は年々低下しており、東京都内市場では1枚平均20~27円となっている。10aあたりの売上は18万~27万円くらいと5~10年前に比べ2分の1くらいに低下した」とある(渡辺ほか 2001)。話者の話では30年前(1980年代)ぐらいいはソテツの栽培に力を入れていたが、10年前(2000年頃)にソテツの栽培をやめてしまったと言う。これはちょうどソテツの価格が年々、低下していると書かれた文献の記述の時期と一致している。

つまり、南房総において、里山の景観の一角を担うようになったソテツが衰退している理由として、農業従事者の高齢化に伴い、ソテツ葉の収穫はきつことからという理由が話者からはあげられていたが、それ以外にも、ソテツ葉の単価が下落したためということも栽培の減少の理由に挙げられるだろうことが推測される。

この点について、さらに明らかにするために、南房総におけるソテツの栽培に詳しい、千葉県安房農業事務所改良普及課に勤務する渡辺照和氏に南房総のソテツ栽培の減少についてお話を伺うことにした(2011年11月3日)。渡辺氏から伺った話の要点は以下の3点にまとめられる。

- 「安房のソテツ栽培にはいくつかの核となる地域があり、それぞれに栽培の経緯が異なる。神戸の布沼では、薬物を含めた花卉の栽培が盛んであった地域で、ソテツもその中の一品に組み込まれていた。一方、富浦の場合は、特産のビワの栽培ができないような土地を選んで植栽されたり、ビワの手がかからない時期の産物としてソテツ栽培が位置づけられたりしていた(ハランもビワの木の下草的に栽培がおこなわれてきた)」
- 「92~93年頃まではソテツの葉が1本100円ほどの高値がついたが、その後、22~23円代まで値が下がった。この値段の急落記に栽培、出荷をやめた人が多い(2011年現在は1本40円ほどとやや、持ち直した)。また、地域によっては、リゾート法の施行で、ソテツの

植栽地ごと、山が企業に売却されたところもあった。また、近年、原因ははっきりしないが、ソテツが枯死するというこもしばしばおきている」

- 「花卉の扱いは、個人と市場との結びつきで行われている。ソテツは一時、共同で出荷するしくみが試みられたが、うまくいかなかった。また、一つにはソテツは極端にいうと、株ごとに葉の特性が異なっており、商品としてのまとまった取扱いが難しい（一方、同じ株から10本の葉を採ると、うまく形や長さがそろふ）。花卉を扱う市場が統合され、販売先が減少したことも、ソテツの葉の出荷が減少した原因の一つ。また、近年になって、都内では仏事でソテツの葉を利用しなくなり、需要自体も減少した。東北でもソテツは仏花として使用していた」

このように、実際には、さらに多くの要因が南房総におけるソテツ栽培の衰退には関係していた。

## 5. まとめとして

はじめにで書いたように、著者にとって、里山にソテツが植栽されているのは「あたりまえ」な存在である。が、それが「あたりまえ」であるのは日本全国の中でも琉球列島を除けばごく限られた地域の話である。また南房総という土地においてさえ、ソテツが里山の中で重要な位置を占めていた時期は1920～2000年頃に過ぎない。こうしてみると、里山というのは多種多様で、たえず変動の中にある生態系ということができる。そのような里山が多様で変動性に富む存在であるならば、まだまだ十分に記述または理解されていないことがあると考えられる。また、今回、奄美大島と南房総という、一見何の連動性もなさそうな地域の里山が、ソテツ栽培の隆盛という事項において、深く結びついていたと言うことも明らかになった。このような里山同士の連動に関してもまだ、知られていないことがあるのではないだろうか。文献の中からは、膨大な量のソテツが奄美大島から南房総へと運び出されたことが読み取れるが、果たしてそれはいったいどのくらいの量であったのか、はたまた奄美大島の里山の景観に、それは具体的にはどのような変化をもたらしたのか、この点についても、まだつまびらかではない。今後、このような今回得られた視点をヒントにしつつ、さらに琉球列島の里山について明らかにしていけたらと考えている。

## 謝辞

本調査にあたっては、文中にもあるように渡辺照和氏に様々な示唆をいただいただけでなく、文献情報に関しても教授いただいた。記して感謝したい。

## 参考文献

安房花卉園芸組合連合会 1978 『創立50周年記念誌 房州の花』

北山雅史編 1997 『ペリー艦隊日本遠征記 Vol. II』 栄光教育文化研究所（原題『アメリカ艦隊

- による中国海域および日本への遠征記』1856年)
- 斉藤明子・尾崎煙男・盛口満 2009 「千葉県におけるクロマダラソテツシジミの初記録と発生初期の棲息地」『月刊 むし』465号 pp.28-32
- 阪本寧男 2007 「里山の民俗生物学」丸山徳次・宮浦富保編『里山学のすすめ』昭和堂 p.28-63
- 第27回日本花き生産者大会 1979 『千葉の花』
- 富浦町 1996 『富浦の花』
- 房総の花編集委員会 1979 『房総の花』土筆書房
- 盛口満 2011 「植物利用から見た琉球列島の里の自然」安溪遊地・当山昌直編『奄美沖縄環境史資料集成』南方新社 pp.335-362
- 盛口満 2013 『琉球列島の里の自然とソテツ利用』沖縄大学地域研究所彙報第10号
- 琉球政府編 1965 『沖縄県史 第11巻資料編1』（復刻版 国書刊行会1989年）
- 渡辺照和・伊藤武男 2001 「ソテツ（キカス）」『農業技術体系 11 花卉編』農漁村文化協会  
追補第3号 438の2-438の4